

〔解題〕

このノートは福島アサが昭和三十八年五月に生誕七十年を記念する気持ちで著述を開始した自伝である。全部で七冊現存する。一冊六十ページで、(7)は昭和二十年五月の末の代田空襲の直後までで切れ、そのあとに当時の父と母の短歌を記録している。一、二箇所補足を貼り付けた箇所を除きほとんど改稿はない。その記述によれば、昭和十五年にアサが入院した時に自序のようなものを書き始め、それがこの「あしあと」の参考になったとしている。別の小型ノート「自叙 第五号 昭和二十年以降」にも戦後の自伝とメモ的な記録がある。そこに「自叙第四号」の表紙断片がはさまれ、裏に戦争最末期と戦後の四点のテーマが書かれている。昭和十五年以降何度か書き直されていた痕跡であろう。用紙は大学ノートの横書六十行を縦書きに使い(ところどころ罫を無視)、空白ページなしにすべて母の自筆ペン書き(かなり癖があると思われる変体かなで読みにくい)でかなり多数の家の自筆図面を加えて書かれている。明らかな誤字、地名等の誤りは訂正したが、執筆当時の語いを示すためそのままにした部分も多い。送り仮名も現行のものとかなり違うが、それも前項に従う。文章には章節は無く、題名を付した部分も中身は厳密に整理されていない。文章は短いが改行はすくない。読点はあるが、句点はほとんどない。誤読やワープロの打ち違いのミスを残していないか心配である。病床にあつて資料を参照する機会はなかったと思われるのに、多くの人名、地名などがおどろくほど正確で、記憶力に驚かされる。

この「ノートNo.2」の三十ページまでは母の死(一九八一年)後「あしあと」(一、二、三)の三冊に分割し一九八五年十月、一九八九年十一月、一九九二年八月の三回、福島龍太郎刊行、酒井9ポ堂印刷の小冊子(13×18.5cm)として発行されていた。多分三十〜四十冊程度※近親に頒布されたものだろう。
※残存する「あしあと」(三)の一冊の表紙に鉛筆で7/37と記してある。

これは龍太郎の友人で印刷を趣味とした酒井氏の御好意によつたものだが、同氏の高齢化や表紙の用紙切れ等のため中絶したらしい。その印刷版の解説も参照させて頂きつつ、他界した兄の遺志をついで今全編の復刻を完

成させる。世紀を超える読者との距離を考慮して史的注釈と簡単な年譜を加える

福島アサは喜三次と結婚し、四人の男児を持った。

一八〇〇年代

- 39 佐賀県有田に福島喜平(喜三次の父) 出生。
- 40 岩手県盛岡に長嶺タミ出生(アサの祖母、弥右衛門の娘で、後に三国忠司を養子に入籍、結婚したが九一年に離縁か?、晩年再度テイ方に依存し、一九二三年死亡時には二女でい三女よしにより、青山学院内の本多てい方から仏式で葬られたと聞く)
- 44 佐賀県伊万里に吉永たつ出生(喜三次の母、福島喜平との結婚は一八六一?)
- 48 岩手県盛岡に杉村濬(アサの父) 出生。
- 67 岩手県盛岡にタミの三女長嶺ヨシ(アサの母) 出生。
- 81 佐賀県有田に喜平の五男喜三次出生。
- 82 杉村濬と長嶺ヨシ結婚。
- 93 朝鮮漢城(現ソウル)に長女杉村アサ出生。

一九〇〇年代

- 04 喜三次東京高商を首席で卒業。
- 05 杉村アサ父母とブラジルへ渡航。
- 喜三次三井物産社員として渡米。
- 06 杉村濬ブラジルで死去 アサ帰国

- 13 喜三次一時帰国、杉村アサと結婚。ダラスに居住。
- 20 喜三次一家帰国。
- 21 一家で兵庫県御影町に住む。
- 25 喜三次中国上海に転勤。
- 32 喜三次東京に転勤。
- 37 喜三次日本経済連盟派遣の経済使節団に夫婦で参加、約半年米・欧視察。
- 46 喜三次死去。
- 63 「あしあと」執筆。
- 81 アサ死去。

二〇〇八年五月 福島新吾記す

あしあと(1) 明治二十六年十月十七日より大正二年六月まで

昭和三十八年五月記るす

七十年という一生は長い旅である。

病気をしながら子供たちにあたたく守られ友情に包まれてよく生きた物である。誠にあり難いといふ外はなく決して粗末には出来ないこの命 然し一方では生きる事に大分疲れを覚えはじめた事も事実であり 今はお召しある日をまつようになった、とにかくも長い一生にはいろいろの思出も多く残されており忘れぬ内に記るして置くことにした。

七十年浮世の命ながらへて 思ひ出をくり筆に記るさむ

朝鮮 京城

明治二十六年(一八九三)十月十七日当時領事館に勤められる父上の任地京城に生まれる 三人の兄のあととはじめての娘の為めか両親からも大変に喜ばれた私は朝鮮の朝をとりあさ子と名づけられる。当時京城には日本の呉服屋も数少なく祝物のために赤い切れが品切れになりし事を母上がよく話された。誠に明るい人生のスタートを切った幸福者といふ外はない

二年後妹の南美子(南山の美という名だと聞かされた)が生まれる頃には王妃事件(一八九五年十月八日、日本人壮士と陸軍部隊が王宮に乱入、閔妃みんびを殺害した)が起り日清戦争が始まり(一八九四年八月一日清戦争宣戦布告、この記述は前後転倒)国事犯として父上は広嶋に捕はれのみとなられ日本に帰国した。「この広島地方裁判所は政治的欺瞞で、予審終結と共に証憑(証拠)不十分として免訴し、杉村濬は放免された明治

〔編集後記〕

この本を作るにあたっては、祖母アサの書いたノート八冊を父新吾が読み解き、ワープロ打ちした。その原稿を、朝子がPCデータ化し、又手書きの間取り図などの画像データ化も担当した。文章が区切りなく続き読みにくいので、段落を付けたり、又文章が飛んだ所を多少入れ替えたりもした。歴史的かなづかいについては、原文のままにした部分と、ワープロ変換のまま現代的なかなづかいになった部分が混在してしまった。ご容赦を願う。いくつかの差別用語については相談の上置き換えた。それをさらに娘智子が出版原稿に編集しなおし、製本所への依頼などを担当してくれた。読み取り、ワープロ原稿化、それをスキャナーで読み取ってPCデータ化する間にたくさん間違いが起り、その校正には母時子の助力もあおいだ。息子嫁孫ひ孫四人がかりの作業となった。祖母は喜んでくれているだろうか、それとも「そんなことしないでいいのに」とあきれているだろうか…。

先に書いた「自序」と後から書いた「あしあと」では家族の呼び方に違いがあり（Dadと主人等）、「あしあと」の方は人に読ませる事を意識した書き方ではないかと思う。但し生前にこれを読んだ人はいなかったようだ。実は私は中学生の時に「おばあさんの生涯についてのレポート」を家庭科で書かされ、祖母の元に聞き取りにかよった事がある。昭和四十二年頃だ。この本に語られている朝鮮、台湾、ブラジル、アメリカでの新婚時代の話はその時に直接聞いた。とても生き生きと語ってくれ、アルゼンチン、チリ旅行の時に書いた日記〔現存する〕まで出して見せてくれた。しかしその時にこのノートの存在については語らなかった。ただ今回の作業中、両親とたくさんの昔話をした中で、手紙類などを大量に焼却処分する様頼まれた時の事を母が話していたので、死後読ませるつもりがなければこれも残しておかなかったと思う。息子でも知らなかった話がいろいろ書かれていて、知っているつもりでいた孫たちだけでなく、全然知らないひ孫達にも「福島アサ」という人を丸ごと知ってもらうためにこの本を作った。それぞれの父（祖父）の若かりし日の姿を見るのも一興だろう。

その後のアサは代田の家の二階で八十七歳まで穏やかに幸せに暮らした。相撲のTV中継は点取り表をつけて楽しみ、野球と国会中継も欠かさず見ていた。一人トランプをしている姿も良く見た。息子やその家族達は始終やってくるし、親戚や昔の知人が訪ねてくることも良くあり、朗らかに談笑していた。そんな折には突然「奥様」風に口調が変わってしまうのが、私には不思議だった。九月十七日の祖父喜三次の命日、十月十七日の誕生日、クリスマスには四家族そろって会食するのが決まりで、特にクリスマスはダラス風の鶏の丸焼きを始め、御馳走が並び、プレゼント（祖母の選んだ物はセンス抜群だった）がたくさんもらえて孫達にとっては、一年で最高の一日だった。

孫達の相手をするのは特に楽しみだったようで、みよ子さんの思い出話では、幼い上の四人の孫を集めて、相撲の勝敗に賭けさせた事があるそうだ。掛け金はおやつのおせんべいや飴で、盛り上がっている最中に新吾叔父が登場して「子どもに賭けを教えるとは何事だ！」と烈火のごとく怒り、すぐやめさせたと言う。「怒った本人は全く覚えていないと言っている」「とっても楽しかったのになぜと がつかりしたのよ」という話で、誠におばあちゃまらしいと思う。私が印象深く覚えているのは、私が木登りをしているのを二階の窓から見詰め「女の子がそんな事を」と叱っておきながら、その後に自分が木登りをしてお母様に大目玉をくらった思い出話を楽しそうにした事だ。最後の最後までおてんば娘の心を残していたのだろう。だから孫達を溺愛する事なく、上手に可愛がれたのだと思う。

昭和三十年頃には人形作りに凝った。初めのうちは孫達を楽しませる目的だったようだが、途中からは自分の楽しみになり、思い出に残っている様々の人の姿を形にしている。自分の幼い姿やブラジルから帰る時の喪服姿のお母様とか、アメリカ時代の自分の姿、ヨーロッパ旅行の思い出（ホルマンディー号のボーイの人形を作ったと本にもある）等々、没後お形見分けとしてあちこちに配られる前に、全部の人形（手元に残していた物で七十体ほど）の写真を撮って記録したが、この本を読んでそれを改めて見ると、はつきりとした映像としての記憶が

あったのがよくわかる。その後はビーズの財布造りに凝った時期、マフラーを編むのに凝った時期もあり、その最中の集中力生産力には驚いたものだ。

昭和四十年頃には健康もだいぶ回復し、外出するようになって、友人と会ったり、宝塚歌劇を観に行ったり。家族を連れて寿司を食べに出かけたり、プレゼントの買い物にも出かけたりした。そんな折のお金の使いっぷりは私たちとは桁が違い少々驚かされた。中でもある夏、箱根の富士屋ホテルに二部屋借りて長期滞在した豪遊は一族の伝説となっている。今回改めてあの時の事を父に聞いてみると、祖父喜三次がアメリカで掛けていた生命保険が、敵国故に支払いが遅れ、あんな頃になって支払われたのだという。祖母は突然の臨時収入を喜び、無駄遣いと反対する声があるのを物ともせず、箱根で夏を過ごしたのだという。家族が付き添いに交代で一、二泊ずつ出かけ私も行ったが、当時は祖母がなぜこんな事をするのか不思議で仕方なかった。この本を読んでみれば、昔の良い思い出を再現したかったのだとわかり、そんな事が出来たことを祖母のために喜びたいと思った。お金を使うことを楽しむ一方で、質素に暮らす時にも一つも嘆くこともなく過ごしていたのは見事だった。

明治生まれの日本女性としては誠に稀有な人生を送ったアサという人は、家族や友人達を愛し、人との交流の中で輝いて生きた。そんなおばあちゃんを私達家族は皆敬愛していた。没後四半世紀たっても親戚中で「アサ子叔母様は素敵な方だった」と語り草にされる人を身近に育ち、人格形成に多大な影響を受けたと思っているのは孫の中で私一人ではないだろう。自分に自信と誇りを持ち、他人との交流を楽しみながらも流される事なく、毅然と生きる事を学んだ。

父新吾はこの本はアサの一代記としてだけでなく、戦前の日本の一面を垣間見る意味もあると言う。第二次大戦直前の日本は軍主導で戦争一直線だったという印象が強いが、経済界には欧米との理解、親和を深めたいという流れもあったことがこれを読むとわかる。外交官であった大叔父杉村陽太郎もドイツと組んでの戦争の無益を説いていたが、その言を入れることなく、祖父喜三次を含む経済界の一部の努力もむなしく、戦争への道を突き

進んでしまった日本を改めて残念に思い、これを戒めとしたい。

この数ヶ月、再び代田の二階でおばあちゃんと話しているような思いがして楽しかった。これは父も母も同じ気持ちだと思う。名前を継いだ孫としてこの仕事を出来た事が嬉しい。

二〇〇八年八月 三浦朝子記す